

2016 年タイ王国・マハナコン工科大学獣医学部
研修報告書（第 1 回：8/17-31）



タイ・マハナコン工科大学での学生交換研修に同行して

はじめに、今回のタイ王国・マハナコン工科大学獣医学部において実施された2週間（2016年8月17日から31日）の本学部獣医学科学生5名の海外研修に同行し、実に楽しく有意義な時間を過ごすことができたことに感謝しています。この学生交換研修プログラムは、マハナコン工科大学と北里大学との国際交流協定に基づくもので、すでにマハナコン工科大学からは、学生が一昨年1名、昨年は学生2名と同行教員1名（Titaree先生）、そして今年の6月には学生5名と同行教員1名（Sukanya = Happy先生）が十和田キャンパスを訪れています。こちらの学生が、マハナコン工科大学へ行くのは今回の研修が初めてでしたので、それに同行する私にとっても多少の不安はありましたが、私自身は昨年の表敬訪問に続いて2回目の訪問だったこともあり、多少、心に余裕があったことは幸いでした。

朝からの高温・多湿、照りつける太陽や、夕方には雨期であることから激しい雷雨もありと熱帯の気候に最初は戸惑うこともありましたが、全員が大きく体調を崩すこともなく、大学での小動物と大動物の臨床研修、学外での野生動物研修、さらに多くの異文化体験を終えることができ、収穫は大きなものであったと確認しています。それが可能だったのは、我々の滞在・研修に対して、学部長のJatuporn先生はじめ国際交流の責任者であるThuchadaporn (= Ohm)先生、Titaree先生やSukanya先生など多くの先生方、そして今年十和田キャンパスに研修で訪れた学生の皆さんが献身的に多大なる支援をして下さったお陰であり、心より感謝すると同時に、人と人の繋がりのおかげさと大切さを強く感じた2週間でした。もし機会があれば、是非ともまた、訪問したいと思っています。

最後に、2週間の滞在期間中、両学部間の交流についてThuchadaporn先生と歓談する機会がありました。学生の交換研修プログラムが今後も続き、充実したものになるのは当然のこと、教員間の研究面での交流も切望するとのことでした。今回の学生研修による交流がきっかけとなり、研究面での交流も盛んになることを期待するとともに、何らかの形で私自身も貢献できるよう努力したいと考えています。

2016年9月30日
小動物第1内科学研究室
伊藤 直之

研修期間：2016.08.17.-31.

研修学生（5V）：

氏名	Name	所属研究室
稲森 幸世	Yukiyo Inamori	獣医衛生学
神崎 菜奈	Nana Kanzaki	獣医公衆衛生学
永田 万歩	Maho Nagata	獣医臨床繁殖学
林 佑香	Yuka Hayashi	獣医微生物学
深谷 美季	Miki Fukaya	獣医公衆衛生学

同行教員：伊藤 直之（小動物第1内科学）



タイ王国マハナコン工科大学夏季研修

平成 28 年 8 月 17 日～9 月 1 日

V-12016 稲森幸世

平成 28 年 8 月 17 日～9 月 1 日の 2 週間、タイ王国のマハナコン工科大学での研修に参加した。バンコク郊外にあるマハナコン工科大学には工学、情報科学、獣医学、経営学の 4 つの学部があり、獣医学部は日本と同じ 6 年制である。私はここで小動物病院 5 日間、大動物病院 2 日間の実習をさせていただいた。

最初の 1 週間は小動物病院での実習だった。小動物病院はほとんど犬猫を専門に診ている。診察、検査、手術を見学させていただいたのだが、驚いたのは学生が診療に大いに参加しているという点であった。様々な研究室に分かれる北里と違い、マハナコン大学では学生は小動物か大動物を選択しそれぞれの病院で実習を積むことになっている。診察では飼い主から話を聞くのが学生であったり、学生と飼い主や患者との距離が近いことが印象的だった。

北里での病院実習をまだ行っていなかったので実際の診療や手術を見るのはこれが初めてだった。見学した手術は鼠径ヘルニア、脛骨骨折、子宮蓄膿症、横隔膜ヘルニア、猫の去勢、断脚等であった。印象に残った手術について書いていくことにする。

子宮蓄膿症は腹部が大きく膨らみ食べられない等の症状が出て超音波検査で高い不透過性が確認される。摘出術ではホルモンを産生する卵巣ごと摘出するのだが、子宮蓄膿症のように激しい炎症と菌血症を伴う場合、考慮しなければならないのが DIC である。DIC の場合、NSAIDs が使用できないのでオピオイドを使用する。手術に関連する痛みのコントロールにはモルヒネ、NSAIDs、トラマドールを組み合わせで対応する。

断脚を行った犬は、1 週間前に闘犬に咬まれて開放骨折したのだが、お金が無かったためすぐに来院出来なかったとのことであった。既に壊死を起こしており、治療にかけられるお金も無いので断脚をすることになった。断脚はタイでは 4070THB、日本円で 12000 円程度で可能である。断脚は痛みが強いため術前術後にステロイド、ケタミン等を投与して対応した。

週の最後に学生による症例発表会があり、1 週間で見た症例について発表していた。使用した薬や今までの病歴まで詳しく発表しており、学んだことを身に着ける上でとても役に立つ機会だと感じた。マハナコンの獣医学部では専門用語を英語で学んでおり、この症例発表も質疑応答に至るまで全て英語で行われていた。また他の日には、獣医学

部の5年生が猫の去勢実習を行うため私達も参加した。小動物実習において、術後覚醒させるという機会がなかったので今回の実習は実際の手術に近く、良い経験となった。北里では半年に1~2回程しか手術実習がないが、マハナコンでは週に1回のペースで手術実習がある。そういった部分から、知識量や実習経験数において自分との大きな差を感じた。

2週目は大動物病院での実習だった。大動物病院では主に馬の診療が多く、他にエキゾチックアニマルが何件か来院した。馬が来院したらまず必ず馬伝染性貧血とトリパノソーマの検査を行う。

まず見た症例は交通事故によって腰部付近を怪我した馬であった。既にかかりつけの獣医の元で傷を縫った後だったが、治療がきちんとされておらず傷の状態が良好ではなかったため大学病院で治療を受けることになった。また、尾を動かさないという問題もあり尾が刺激に反応しないためX線検査を行った。X線は持ち運び可能な小型照射器を用いて尾の周辺のみ撮影したが、特に異常は見当たらずさらに頭側に原因があるという結果となった。他に、馬の繁殖も行っており、直腸検査でエコーを用いて子宮頸と卵巣のサイズを計測した。また、マハナコン大学には歯科専門で特に馬の歯科を主に診ている先生がおり、馬の歯科検査について学んだ。

エキゾチックアニマルではタヌキと黒鳥の診察を行った。タヌキは販売前の身体検査を行って欲しいということで来院した。血液検査と糞便検査を行い、念のため駆虫薬を投与した。一方、黒鳥はボートに攻撃しようとして翼の内側の骨が折れてしまった症例だった。治療は不可能だったため翼は切断することになった。エキゾチックアニマルと言っても日本で多い室内飼いの小動物とは異なり、野生動物に近い動物が多かった。

先述の事故にあった馬とタヌキの症例に関してはディスカッションを行ってどのような処置をすべきか考えた。一見すると単純に見える症例でも事実を整理して考えていくと原因となり得るものが複雑に関係しており、様々な行うべき処置が見えてきた。

動物病院実習の合間にカオキアオ動物園やカオヤイ国立公園、アユタヤ等、マハナコンの先生方や学生さんが連れていってくださり、タイの文化や自然に触れ合うことが出来た。動物園は動物と人との距離がとても近く、より自然に近い形で飼育されていると感じた。アユタヤでは象の農場を訪問するというとても貴重な体験をさせていただいた。アユタヤに限らずあらゆる場所で象の模様を目にし、タイでは象は特別な存在であることを実感した。チャトゥチャックウィークエンドマーケットは週末にのみ開かれる巨大なマーケットで多種多様な店を見る事が出来る。ここで動物を販売している区画を案内

してもらったのだが、日本のペットショップのイメージとは全く違うものだった。良好とは言えない衛生環境の中で犬猫はもちろん、爬虫類やリス、ハリネズミなど様々なエキゾチックアニマルが売られており、大学病院で見たエキゾチックアニマルと合わせてタイのペット事情を垣間見た気がした。タイには野良犬猫がたくさんおり路上のあちこちで自由に生活する様子が見られる。日本にはなぜ野良犬猫が少ないのか、どのように対策しているのかということタイの学生さんに質問された。日本では犬猫に対して殺処分が行われているがタイでは宗教上の問題で簡単には殺処分が出来ないそうだ。日本はタイと比べて確かに衛生環境も良く野良犬猫の管理も行き届いているが、その対策として殺処分が1番に挙げられる現状は改善しなければならないと感じた。

今回の実習で動物の診療からタイの文化まで様々学び、得るものがたくさんあった。タイの学生の積極的な姿勢に同じ獣医学生として非常に刺激を受け、それは自分にとって大きな収穫であったと思う。今回学んだことを生かして今後も勉学に励んでいきたい。



タイマハナコン工科大学における 2 週間の研修

5V-12050 神崎 菜奈

私たちは 2 週間に渡りタイのマハナコン工科大学にて海外研修を行った。研修は 10 日間で行い、内容は獣医学部の研究室見学、小動物臨床センターの見学、大動物臨床センターの見学、動物園の動物病院兼繁殖センターの見学であった。

はじめの研究室の見学では、病理学や微生物学の研究室の見学をし、実際にサンプルにおける菌の同定の練習として培養やグラム染色などを実際におこなった。やり方は日本で学んだものとほとんど同じであったが、研究室のものは学生が使うことはほとんどないらしく、我々のように学生が研究室でさまざまな器具を使い研究が行えることはとても恵まれていることだと感じた。また解剖は小動物用と大動物用に分かれておりさまざまな標本もきれいに整列されて展示場のようにになっていた。骨格標本もあり、ゾウなど珍しいものをみることができた。

研究室の見学の翌日に動物園および病院兼繁殖センターの見学を行った。動物園は日本にくらべてとても開放的であり、敷地も広く動物と触れ合えるところが多く感じた。敷地面積が広いためトラクターでの移動で園内を回っていたが、自家用車でもまわることができ、サファリパークのようであった。動物病院はおもに動物の治療と人工授精用の精液・胚の保存と発情の観察などが行われていた。アメリカと共同でヒョウの繁殖と自然に返す活動も行っていた。また絶滅危惧種の保存にも力を入れており、普段では日本でも見ることのできない内側をみることができた。

次に 5 日間に渡り小動物臨床センターの見学をおこなった。普段の診療からオペまでさまざまな場面を見学させていただいた。タイの学生は 6 年生が主に診療やオペに関わり、診察では PE をすべて学生がとり、オーナーとよく話をし、ペットがどんな状態で鑑別診断はなんなのかなどを学生同士で話ながら先生に伝えていた。またオペの際も麻酔導入から挿管、記録、麻酔管理などは学生が行っており、写真や記録をとっておりとても熱心であると感じた。手術室の設備などは北里大学のほうがはるかに最先端であったが、先生方は最新機器がないぶん、どのように自分たちの技術で動物を治すことができるのかを常に考えている、とおっしゃっていた。このような考え方はやはり高度な機器があってもなくてももっていなければならない考え方であると強く感じた。

普段の診察における検査やオペにおけることも先生方に詳しく解説していただき、またオーナーの方々も快く見学を許してくださったので、多くの症例を見ることができた。

小動物病院実習期間中にちょうどタイの5年生のオペ実習があり、私たちも急遽参加することになった。猫の去勢実習であったが、タイでは動物の安楽死は許されておらず、私たちにとって初めて麻酔から覚ますまで行う実習となった。猫の手術を行った経験も見た経験もなかったのもとても不安であったが、先生方の指導のもと無事に終わることができた。麻酔を覚まして本当にちゃんと生きているのかとか、ちゃんと生きていけるのかなど術後もとても心配であり、実際に手術を患者に行うことは想像以上に大変なことだと身にしてみた。

残念だったのは私が臨床系の研究室でない上に大学の病院実習もまだ受けていなかったため、北里大学との比較できず日本ではどのように病院業務を学生が手伝っているのか比べられなかったことである。事前に自主的に見学させてもらうべきであった。

小動物臨床センター見学後の3日間は大動物臨床センターの見学を行った。タイの大動物臨床ではおもに馬が患畜でありその3日間で牛の患畜は一度もみななかった。また手術室などはとても綺麗で整備されており、大きなモニターや見学スペースなどもあり大人数でも手術などが見やすいようになっていた。私たちは馬の直腸検査を実際にやらせてもらい、卵胞の発育具合や黄体の大きさの測定などエコーを使って検査した。また歯科の専門医の先生がいらっしやったのもあり、馬の歯科について教えていただき、器具は知っていたけど実際に使用する場所は初めて見たのもとても勉強になった。北里大学の实習ではおもに牛での実習であったので普段経験できない馬をみることもできたのはとてもよかった。

またエキゾチックアニマルの診療は基本的に大動物センターで行っており、私たちの実習期間中にはタヌキとブラックスワンの診療が行われていた。たぬきの診療に関しては先生方と検査の結果の判定から治療方針の決定法についてディスカッションを行った。大学で習ったように順を追って、治療や検査に飛ばないように考える方法は普段見慣れないたぬきのような症例がきても適応できることが実際やってみてよくわかった。

実習以外では国立公園やタイの有名なマーケットなど日本にはないような異国の文化に触れることができた。なかでもブッタのお祈りの時間にタイミングよく行くことができ、日本とはまた異なる宗教文化にも触れることができた。日常生活では基本的に外食である食生活の違いや、交通面での違い、シャワーでお湯がでないことや、トイレが手動であることなどさまざまな違いはあったもののすべて新鮮でありまた、現地の方々の優しさもあり楽しい2週間を送ることができた。

今回の実習でなによりも感じたことは英会話や専門用語に関する知識がまったくも

って足りていないことである。タイの学生は基本的に専門用語を英語で習っているため私たちが理解できずに話がスムーズに進まないということが何度もあった。もう少し英語ができていれば身につくものも多かったのではないかと強く感じた。今回の研修を通して学んだことや感じたことをこれからにつなげていけるように頑張りたいと思う。



タイ（マハナコーン工科大学）研修レポート

繁殖学研究室

12098 永田万歩

【概要】

平成 28 年 8 月 18 日~8 月 31 日の 2 週間、タイに滞在し、マハナコーン工科大学での研修を受けた。休日及び休憩時間には、観光や文化交流に参加した。

【マハナコーン工科大学での研修】

マハナコーン工科大学では、大まかに分けて・基礎系・小動物系・大動物系の研修を受けた。

以下に主な内容を記す。

・基礎系

18 日のみ。解剖学研究室、ウイルス学研究室、細菌学研究室、病理学研究室などの設備や施設の見学、研究内容の説明を受けた。

細菌学研究室では、培地の作成やサンプルの塗抹、グラム染色などを実際に行った。培地の作成や塗抹の方法は北里大学の実習で行った操作と同様だと感じたが、培地へのサンプル塗抹などでは無菌操作の手順や白金耳の取扱について違いがあると感じた。



《培地への塗抹。バーナーから離れたところで塗抹し、使用する白金耳は必要な本数を一気に火炎滅菌してから順番に使用するスタイル》



《血液寒天培地の作成》

・小動物系

22日～26日の5日間。大学付属の小動物病院にて、診察や診断のようす、手術の見学、学生による発表と討論の見学などを行った。24日には、学生による猫去勢手術実習に参加し、一匹の猫の去勢手術を行った。

診察は6年生がはじめに問診、TPR測定、外貌検査などを行い、その後先生が詳しく検査をし、診断を下すという形で行われていた。診察後に先生方から症例についての説明を受けた。

手術はキャップ、マスク、シューズキャップを着用して、手術室内で見学することができた。

犬子宮蓄膿症、猫横隔膜ヘルニア、猫の死胎児摘出（卵巣子宮摘出）、犬の咬傷（開放骨折）のトリートメントと、その後の断脚などが行われ、解剖学的な説明、薬品使用に対する注意事項、症例の説明などを受けた。



《手術見学》



《ふたつの手術を同じ部屋で並行してすすめることも》

学生による発表は、初めて実施されたそうだが、6年生たちはしっかりとした英語で症例についてのスライド発表を行っていた。

我々が参加した手術実習で、私は麻酔係を担当した。北里大学で使用していた器具とは異なるものが多く、逐一「これはどうやって使うのですか？」と質問しながらの

実習となった。特に印象的なのは、心音を聴くためのチューブ（正式名称は聞きそびれてしまった）であった。「口から食道にチューブを入れ、反対側についた聴診器で心音を探しながら奥に進めていき、心音が聞こえるところで心拍数を測定する」という使用法だったが、聴診器を耳に強く押し付けないと心音がなかなか聞こえず、使用が難しいと感じた。

・大動物系

29日と30日。日数が小動物に比べ少なかったこともあり、見学できたケースは多くはなかった。腰部~臀部の裂傷に対して不適切な処置を受けた馬のトリートメントや、犬に噛まれた仔馬の処置を見学し、処置の一部を体験した。

他に、馬に対する直腸検査・エコー検査による発情周期のチェックや、馬の歯科処置の見学と体験を行った。北里大学では実習でも牛を扱うことが多く、大動物診療センターで多く見られる動物も牛であるため、牛に触れないことに少し驚いた。

また、マハナコーン工科大学の大動物病院ではエキゾチックアニマルを扱っており、プレーリードッグ、たぬき、ブラックスワンの診察や治療を見学することも出来た。診察の見学・体験の後、ディスカッションに参加した。症状、問題点、その原因などをリストアップし、その内容から選択すべき処置を導き出すためのディスカッションは、これまでの実習などでは経験したことがないもので、今後自分で診断を下し、処置を決定するときの基本となる重要なものに思えた。



《馬の経直腸的エコー検査》



《馬の歯科検診》

【観光など】

・カオ・キアオ動物園 Khao Khaew Open Zoo

19日。動物園観光の後、動物園内の診療センターと野生動物繁殖センターを見学した。私は特に繁殖センターでの説明が面白く感じ、ゾウの糞からホルモン値を測定し人工授精のタイミングをはかるなどの話は非常に興味深かった。



《日本ではあまり見られない熊猫を肩にのせることができた》



《案内して下さった Dr.ゴルフと》

・カオヤイ国立公園 Khao Yai National Park と周辺地域の観光

20日、21日。カオヤイ国立公園の散策では、日本での日常生活ではみられないような小動物や植物、虫をみかけることができた。ナイトサファリでは豪雨に見舞われたためろくに動物を探すことはできなかったが、良い経験ができたと思う。

その他いろいろなアクティビティに参加した。



《国立公園内の滝への道で出会ったトカゲ》



《ペイさんと。ここまでの道のりが過酷》

・アユタヤ観光

27日。寺院、遺跡を訪れ、タイの仏教文化に触れることが出来た。エレファントパークおよびプライベートなゾウの牧場の観光もでき、日本ではなかなか見られないゾウの姿をみることができた。



《ゾウに乗るジェニーとハッピー先生》

・チャトチャックマーケットやナイトマーケット

26 日夜に高架下のナイトマーケットへ、28 日にはチャトチャックマーケットへ。
「熱気がすごいフリーマーケット」という雰囲気、現地の販売員の方との値切り交渉や交流ができた。動物の取り扱いに特に驚いた。



《チャトチャックマーケットで。ひしめくハムスター》

【個人的な感想など】

タイでの生活は驚きと戸惑いの連続であった。シャワーから水しか出ない、風呂場の電気がつかない、天井の裏からネズミの死体が出てくる、日に日にヤモリの糞が部屋に増えていく.....など、日本ではなかなか体験し得ないことを一気に体験できたような気がする。しかしそれも慣れてしまえば苦ではなくなった。色々と食べさせてもらったタイ料理は想像より辛いものが多く、苦しみ悶えたこともあるが選べば辛いものもたくさんあった。そして辛いものの味付けは日本人好みだと（個人的には）感じた。



《トムヤム。私には「辛い」以外の情報は入手できない》



《照り焼きのような味付けのチキン。食べ慣れた味がする》



《奥二皿がパッタイ（タイの焼きそばみたいなもの）で手前がソムタム（パパイヤサラダ）ソムタムは辛い。パッタイは少し辛いが甘めで食べやすい》

現地の方々との交流は当然英語で行われるので、そもそも英語が堪能ではない私はいろいろな場面で苦戦した。簡単な構文だけで会話を成立させようとしても日本人のカタカナ発音英語では単語を解してもらえないので、一々文字に打ち出したりすることもあった。逆に、タイの人々の英語にも癖があることが多く、文脈想像力で単語を推測することも多くあった。そんな英語力でも日常会話や世間話はなんとなく成立したが、疾患名や病態などの専門用語は推測やジェスチャーではどうともならないため、専門用語をもっと勉強してくるべきだったと毎日のように後悔した。

また、私たちはまだ病院研修が始まっていないので、「この設備は北里にもあるの？」「北里だとどういう診察をしているの？」という質問に「分からない」としか答えられず歯がゆい思いをした。動物病院の設備や診療形態を前もって見学などさせてもらえばよかったと感じた。

そんな準備不足でコミュニケーション不全な私たちに対し、先生方、学生さん、そして色々な所で出会った店員さんたちは親切に、根気よく、色々なことを話しかけ、質問し、教えてくれた。様々な人の恩恵があったからこそ、この2週間を「楽しく実りがある時間だった」と思えるのだろう。

このレポートを作成しながら、タイの皆さんをはじめ、頼りない我々を導いてくれた伊藤先生、そして一緒に過ごしてくれた他のメンバーへの有り難みを改めて感じた。



《はじめての学食》



《小動物病院の先生方がタイスタイルしゃぶしゃぶに連れて行ってくださった》



《アユタヤの遺跡にて》



《仲良しな伊藤先生とジェニー》

私は、タイの公衆衛生について知りたいという理由でこの研修を志望した。私は特に、野犬や野良猫に関するタイでの取り組みに興味があった。

タイでは、野良犬野良猫の殺処分を行っていない。インターネットで検索してみたところ、「野犬に不妊手術をして、また街へ戻す」という活動をしているシェルターがいくつかあると出てきたので、そのような施設の見学を一番に希望していた。しかし、多数決の結果、シェルターは見学先から除外されてしまった。

最終日、私たちはタイ研修についての発表を行った。そこで、マハナコーン大学の学生さんから出た質問が、「なぜ日本には野良犬がいないのか？」というものだった。2週間の研修の中で、私にとって最も印象深く記憶に残っているのが、この質問をされた時だ。私はその質問に「野良犬は、捕まえられて、飼い主が見つからない場合は殺されるからです」と答えた。それらのやりとりに対し、学部長先生が、このような説明をした。「(タイの学生さんにとって) 日本で犬を殺処分しているということは、ショッキングなことだと思います。タイでは、野良犬がいたら、みんな飼ってあげたいとか、ご飯をあげたいと思って、大切にします。なぜなら私たちはみんな仏教徒で、命を大切にしているからです。しかし、日本では殺処分は必要なことで、止められるものではありません。分かり合うのは難しいですが。」私はこの説明に、なるほどと思った。

マハナコーン大学では、手術実習を小さな単元にわけたり、学生の役割を入れ替えたりしながら、何度もやるのだという。動物は最後に覚醒させる。それに対して、北里大学では長い時間をかけて一気にいろいろな術式を行い、最後には犬を安楽殺する。タイ

では実習のたびに多くの動物を殺処分することへの反対意見が多いからなのだろうと思う。日本でも都市部の大学では生体実習は廃止になりつつある。タイでは日本より「命を大切にしよう」という意識が根付いているのだろう。

しかし、日本に戻り、このことを思い起こすうちに、疑問や違和感がうまれはじめた。日本では、野良犬や猫に餌をやることは、子供を産ませることにつながり、さらに野良を増やす結果に繋がるのだと言われる。それは飢えや病気に苦しむ動物の増加に繋がり、命を大切にしているのではなく、無責任に不幸な命を増やしているとみなされる。また、タイではマーケットで様々な動物が売られているが、小動物などは狭いケージに詰め込まれて、明らかに死んでいるものや病気のものも放置されている。日本では、観光地でこのようなことをしていると、バッシングされて、処罰の対象となることもあるだろう。ひよこ掬いや、生体クレーンゲームが廃止されたように。しかし、タイではいまだそれを「観光の一部」として取り扱っている。

はたして本当に、タイの人々がみんな「命を大切にしているから、犬を殺さない」のだろうか。マーケットの動物たちは、収益源であるから物同様に扱われるのだろうか。それとも、慈しむべきは犬や猫に限られているのだろうか。日本で言う「動物愛護」や「動物福祉」と、タイでの「命を大切にする」の違いはなんなのだろうか。宗教の違いや思想・文化の違いから生まれる価値観の差というのは容易には受け入れられないために、私の中に違和感が生まれたのだと思う。しかし、その価値観や思想を知ってみたいと、私は思う。

もし次の機会があるなら、私はぜひともこのような疑問について、いろいろな人に尋ねてみたい。日本は動物愛護に関しては後進国だと言われている。ではタイは？先進国と言われているヨーロッパ諸国の動物愛護に対する姿勢や取り組みは？研修を終えてから、もっと深く学びたいという思いが強くなった。

来年、タイへの研修に参加する人の中に私と同じようなことに興味がある人がほしいならば、ぜひともシェルターなどの見学を日程にねじ込んで、私にその話を聞かせて欲しい。観光地ならば個人の旅行で気軽に行くこともできるのだから、研修や見学でないとなかなか見られないものを見てきてほしいと思う。



タイ研修レポート

v12107 林 佑香

8月17日から2週間、タイのマハナコーン工科大学で研修した。大学での実習だけでなく週末には様々な場所へ赴き、日本と違った文化や壮大な自然を肌で感じる事が出来た。

到着した次の日には、大学内の解剖学、細菌学、ウイルス学、病理学などの研究室を案内していただき、微生物学の研究室では実際に作業を体験した。内容はグラム染色や培地の作成、培地へのサンプルの塗抹などだ。私は微生物学研究室に所属しており、普段研究室でも大動物診療センターからの検体の菌の同定や薬剤感受性試験を行っている為、手技や対象サンプルの違いなどとても興味深く、有意義な時間を過ごすことが出来た。

金曜日には Kaokeaw zoo へ行った。非常に大きな動物園で、徒歩ではとても回りきれない規模だった。驚いたのは、日本よりもどの動物も距離が近く、鳥類以外ははっきりと柵、という概念が感じられなかった事である。柵によってこちらとの空間は区切られてはいても、高さがなく、象は餌をもらうためにこちらまで鼻を伸ばし、キリンも餌をもらうために首を伸ばしていた。あれほどまでに近くでキリンを見たことが今までになく、まして餌をやった経験など無かった為、とても貴重な体験となった。また、引率してくださったあちらの大学の先生が以前この動物園でホーンビルの繁殖に関わっていたということで、繁殖が成功した種や、なかなか難しく未だ成功していない種についてなど色々とお話を聞くことが出来た。動物園の病院にも赴き、施設を見て回りどんなことを研究しているかなどを教えていただいた。

土曜日、日曜日には Kao Yai National Park へ行った。自然公園はとても壮大で、大きな滝は圧巻だった。森の中では見たこともない虫やトカゲがたくさんいて、どこを見ても飽きる事がなかった。夜にはナイトサファリへ出かけたが、雨季ということもあり途中で大雨に見舞われ、野生の象に出会うことはできなかった。



月曜日からは1週間、小動物の動物病院での実習だった。診察室での診察の様子を見学したり、手術室に入らせていただいて、手術を見学することができた。診療の場面ではオーナーさんそれぞれに様々な事情があり、日本ではあまり見られないが金銭的な問題で受診自体が遅くなった上に、手術も翌日にしかできなかつたり、予算の都合でできる手術や麻酔や薬を使える場面が限られたりと、それぞれのケースに合わせて方針を決めているのがとても印象的だった。手術は蓄膿症や死胎仔を取り出す帝王切開に始まり、断脚や骨折の整復などの整形手術まで様々なケースを見る事が出来た。またそのうちの1日は学生の手術実習に参加し、猫の虚勢手術も経験した。特に北里大学での外科実習は犬を使って行うため、猫に麻酔をかけメスを入れるのは初めてのことで、とても貴重な経験となった。



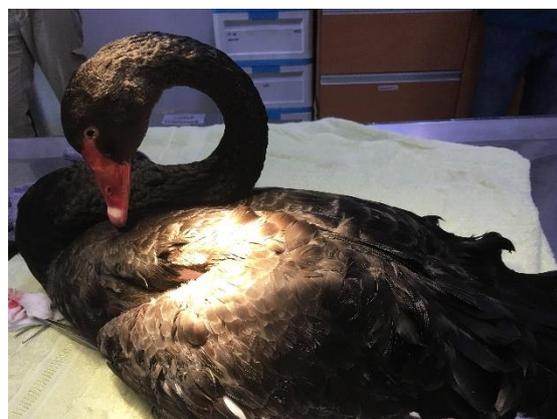
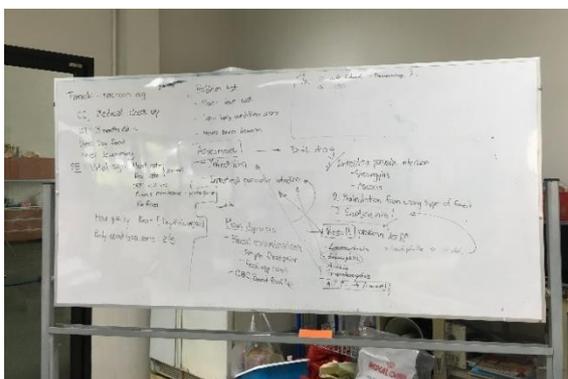
2度目の週末の土曜日には Ayutaya へ赴いた。Ayutaya では遺跡を見学し、そしてとにかくたくさんの象に出会った。象に乗り、象に触れ、象に餌をやり、象の繁殖を行っているところへも連れて行っていただいた。あれほど間近で子象から大人の象まで大小様々な多くの象を見ることが出来る機会はなかなかないと思う。象たちの皮膚の感触や目、大きさは日本へ帰った今も忘れることが出来ない。



日曜日は Jatujak Weekend Market へ赴いた。驚いたのは、日本では信じられないがまるで他の雑貨や食料品と同じ感覚で生き物を売っている区画があり、ケージに入った大量のハムスター、ハリネズミ、モモンガ、リスなどに圧倒された。特にリスは日本ではまず見られないだろうまだ目も開いていない幼い個体が当たり前のように売られていて、とても驚いた。珍しい魚や爬虫類もたくさんいて見ていて飽きなかったが、やはり衛生面や動物の健康状態が気になった。



最後の週は月曜日から水曜までの3日間、大動物の動物病院での実習だった。日本では主な対象患畜は牛のイメージがあるが、タイでは患畜はそのほとんどが馬であった。また北里大学とは違い、大動物の動物病院ではエキゾチックアニマルの診療も行われていた。実習では馬の歯科における治療の道具を実際に使ってみたり、患部の消毒の手伝いをしたり、直腸からエコーを用いて発情周期の判定を行ったりした。日本での普段の実習では牛を相手にしか直腸検査を行ったことがなかったので、これもとても貴重な経験となった。またエキゾチックアニマルに関しては、タヌキとブラックスワンの検査や治療を見学することが出来た。タヌキの血液検査の結果を見て色々なことを判断したり、実際に見た症例のケーススタディを行って皆で話し合い、先生にヒントを貰いながら考えることはとても勉強になった。



最終日にはプレゼンテーションを行った。14 日間で学んだことを皆でまとめて発表した。最後にマハナコーン工科大学の学生から保健所のことについて質問された。とても答えにくかった。野良犬や野良猫に対する考え方が、宗教の面での考えもあり日本とタイでは大きく違っている。日本で言う保健所のような施設には安楽死という選択肢がない。私たちと彼女たちが、今までそれぞれの国で生きてきて当たり前のように染みついた感覚はなかなか共有できないものなのかもしれないが、どちらも間違っておらず、そしてどちらも正解ではないのかもしれないということを痛感した。

タイでは思っていたよりも多くの動物と出会い、人々と生活を共にする野良犬たちを目の当たりにし、多くの刺激を受けた。大学生という貴重なこの時期に、タイに研修へ行けたことを、とても嬉しく思う。日本とは文化も気候も違い、特に滞在した期間は雨季ということもありとても湿度が高く毎日とても暑かったが、それでも得るものはとても多く、なによりタイの学生はとてもまじめで勉強熱心で、彼らを見ていると私たちには今以上に更なる努力が必要であるとそう強く思った。今後の人生で一体私はどういう職についてどういう事がしたいのか、また新たに考えるきっかけともなった。この経験を活かし、将来獣医師としてどう在りたいのかをしっかりと考えたいと思う。



海外研修実習報告書：マハナコン工科大学にて

H.28.8.17～8.31

V12115 深谷 美季

北里大学はタイのマハナコン工科大学獣医学部と交流を更に活性化する目的で、学術交流協定を結んだ。その1つとして、2016年8月17日から同月31日までタイでの海外研修が企画された。前年の秋、面接による選考により、私はタイの海外研修に参加することができた。この研修では、小動物や大動物の診療や様々な症例の臨床現場の見学、多種多様な野生動物との触れあい、タイ独自の文化体験など、刺激のある毎日を送ることができた。私はこの海外研修に参加して2つの事柄について感銘を受けた。それはタイの野生動物管理事情と猫の去勢実習だ。以下に、この2つに対しての報告と感想を述べる。

1つ目は、タイの野生動物管理事情だ。タイには、自然公園や動物園などの大きな動物管理施設が複数存在し、自然を重んじ野生動物保護に力を注いでいる印象がある。そこで、野生動物に対してどのような管理をしているのかをぜひ実地研修をしてみたいと思っていた。幸い現地では、カオキアオ動物園と、カオ・ヤイ自然公園で研修をすることができた。

特に関心したのは3日目に訪問したカオキアオ動物園での研修である。「カオキアオ」とは「緑の森」という意味で、その名前にあるように、緑豊かな8000km²という広大な土地に約300種8,000頭の動物が飼育される動物園である。この園内で飼育されている動物は、その習性や行動の特徴を生かし、とてもオープンな方法で飼育されていた。たとえば、テナガサルは檻ではなく、池に入らないという習性を生かし、周囲が池に囲まれた小島に自由に放たれていた。また、キリンは、シマウマやエランド等他種の動物と共に本来の生息地であるサバンナのような広い芝生地で飼育されていた。日本の動物園ではスペースが狭い飼育区画で刺激のない生活をしているために、その環境ストレスからくる常

トレーニングスケジュール表

日付	研修内容
8/18	オリエンテーション マハナコン工科大動物診断センター
8/19	カオキアオ動物園
8/20-21	カオ・ヤイ自然公園
8/22-26	小動物診療センター
8/27	象キャンプ訪問およびアユタヤ観光
8/28	チャトゥチャック・ウィークエンド・マーケット
8/29-30	大動物診療センター
8/31	学生プレゼンテーション

同行動がよく見られる。一方、この動物園では多くの動物が元来持つ習性を生かした飼育方法や広いスペースで飼育され、場合によっては他の種の動物と共存していた。これらの方法で飼育動物は刺激を与えられているためか、私には動物たちに大変活気があるように感じた。

ここではさらに、動物病院とワイルドリプロダクションイノベーションセンターを見学した。これらの施設では、動物管理の他に、野生動物を保護し繁殖させて野性に還す活動や絶滅危惧種の保存を行っていた。例えば、象の糞からホルモン測定を行いプロジェステロンと黄体ホルモンの動態を観察し、その繁殖傾向を探っていた。また、絶滅危惧種の耳から皮膚組織を採取し、将来的に ips 細胞を作成する計画についても話を聞いた。他にも数多くの研究について研修をすることができた。このようにこの動物園では見学する人々を魅了する機能を果たすだけでなく、野生動物の保護や繁殖に対しても熱心に活動していることを知り感心した。以前より野生動物の減少、絶滅が問題となっているが、それに対して私たち人は環境改善・野生動物保護に努めなければならないと考えている。動物の知識が豊富な獣医師がこれに関わることは適任であり、獣医師が保護活動・研究に勤しむことが実現しているカオキアオ動物園はすばらしいと思った。

2つ目は、研修8日目に猫の去勢実習で術者として参加したことだ。マハナコン工科大学獣医学部の学生は5年生から6年生にかけて手術実習を複数回こなし、さらに長期間小動物診療センターと大動物診療センターに出て、獣医師と共に診療や手術を行うため、臨床現場に携わる機会が豊富である。一方、北里大学は手術実習の回数が少なく、ポリクリも臨床現場の見学のみで、臨床経験が少ない。そのため、タイで手術の術者をするのができたのは、とても貴重な経験であった。手術前日は、実習の具体的な資料がなく予習が不十分になってしまった。さらに、初めて猫を用いた去勢を行ったため当日は不安を感じた。実際に生体を目の前にして緊張したが、周りで外科の先生方が丁寧にサポートしてくださり無事に手術を終えることができた。手術を振り返ると、焦って丁寧に手術を行えず、特に結紮が雑になってしまったと思う。今回の実習を機に、練習を行い自分の技術をより高める努力をしたいと感じた。

タイでの研修は、本大学だけでは経験できない多種の動物との接触、臨床経験にあふれ、今まで以上に野生動物や自然、そして臨床に関心を持つようになり有意義であった。特に、大動物診療センターは2日間のみ研修であったが、来院した動物は馬や黒鳥、タヌキなど、牛や豚といった産業動物以外の診療も見学することができ、症例はバラエティーに富んでいた。より長く滞在することができたら今回以上に多くの症例に出会え

たのかもしれないと思うと、滞在期間の2週間は短いと感じるほど臨床現場は楽しかった。

5年生後期は病院実習が始まる。臨床現場に立ち、また、たくさんの症例に触れることができたタイでの経験を生かし、自分にとって実りある実習となるように励みたいと思う。



